

ソイヤーズ博士をお迎えして

武 藤 誠

去る平成22年12月22日から三日間、ニューヨークのスローン・ケタリング癌研究所のチャールズ・L・ソイヤーズ博士を京都にお迎えして講演を拝聴し、また多くの癌研究者、臨床医と討論をして頂く機会に恵まれました。ソイヤーズ先生は臨床血液学の医師であり白血病の専門家としてイマチニブ（グリベック）の臨床開発に関与され、同時にその耐性機構の解明に重要な貢献をされたことでご高名な先生ですが、最近では医師や研究者が主導した癌治療薬の開発にも成功されて、その成果のひとつである前立腺癌治療薬の権利を日本の製薬企業が購入したことで話題になりました。

ご本人とご家族の希望でクリスマス休暇中のご訪問ということになり、京都では23日の天皇誕生日に京都大学での講演会や研究者との討論に当てる変則的なスケジュールとなりましたが、結果的には却って多くの方々にご参加頂けました。京大関係者だけでなく、広く関西一円から百名を超える関係分野の先生方にお集り頂く機会となりました。また、会場を分かり易くてアクセスの良い芝蘭会館（同窓会館）ホールにしたことも幸いです。

当日午前中は、私どもの研究室を始め、京大内の研究者と最近の研究成果を討論して頂きましたが、温厚な博士の表情にも緊張感が漲り、真剣勝負のような討論が行われて大変有意義な機会でした。また、昼食時には大学院生、ポスドクから准教授までの若手研究者にお集り頂き、臨床現場で忙しい医師の研究者に、どのようにして研究活動を維持したらよいかというテーマについて、ソイヤーズ

博士の経験を基に相談に乗って頂きました。私自身も初めて知ったのですが、UCLAで白血病専門医として臨床現場で医療活動をしているが実験室での研究を続けることは当時未だ確立されていない生き方（career path）で、病棟や研究室の多くの上司に依頼して、様々な工夫をしながら研究を続けられたと聞きました。この点は癌研究が臨床現場と直結している今日、特に重要だと思われれます。

当日午後は、京大の臨床の先生方と新しい癌病棟を視察して頂き、癌関係の臨床教授と懇談して頂いたあと「分子標的制がん剤に対する耐性の克服」と題したご講演をして頂きました。癌の分子治療の作用と耐性化の機構、さらには新規の分子標的薬の紹介等もあり、活発な討論が行われ、関係者十数名とのその後の夕食会でも続きました。その後ホテルへお送りした車中で、博士は今回の企画に対し、大層喜んでお礼を申されました。クリスマス休暇を丸一日、極めて多忙なスケジュールを押し付けて、私は多分に申し訳なく思っていたのですが、機会を最大限に生かして多くの研究者と会って頂くのが米国流の最上のおもてなしと心得ていたので、期待通りの結果となり喜んでおります。

一方、ご主人から丸一日引き離されたご家族が充分京都を楽しんで頂けるように、英語の堪能な秘書をガイドに、ご家族のご希望に沿った観光をして頂いたことは云うまでもありません。24日と25日はご希望通りご家族水入らずのクリスマスを楽しんで頂き、26日朝に、名古屋からお迎えに見えた富永先生とホテルのロビーでお別れの御挨拶をした際にも、ご家族全員が今回の京都訪問を大変お喜びであったとお礼を申された事を付記しておきます。

（京都大学大学院教授）